学苑・日本文学紀要　第九五一号　三二～五三（二〇二〇・一）

# 六条斎院禖子内親王家物語歌合と『夜の寝覚』

## ――『夜の寝覚』の挑発と存亡・序章　その㈡――

久下裕利

### 一　はじめに

後冷泉朝の天喜三（一〇五五）年五月三日庚申の夜、六条斎院禖子内親王家に於いて題を「物語」とする史上唯一の歌合が催された（廿巻本『類聚歌合』）。新作の十八篇に及ぶ物語が競われ、その内容（物語本文を読み上げる可能性を留保する）と作中歌が披講されたとおぼしい。

物語作者がそのまま方人となる当時流行の歌合形式であり、その作者たちは、斎院家の女別当や宣旨という上臈女房をはじめとして、斎院家で開催された二十五度の歌合のうち十回以上参加経歴のある中務（18）、左門（19）、讃岐（14）、武蔵（15）、式部（19）、小馬（18）などの常連女房が顔をそろえ、加えて禖子（後朱雀天皇中宮嫄子所生）の姉宮である祐子内親王家の女房であるらしい宮の少将や宮の小弁などが参加している。

そこで、疑問となるのが、祐子内親王家の女房である孝標女が、『朝倉』などを既に制作発表して物語作者としてその名を知られていたはずなのに、[注(1)]何故それらしき姿がみえないのか。[注(2)]『更級日記』には物語歌合の天喜三（一〇五五）年五月三日に近時する年月日表記に当日記に於ける唯一の例として知られる「天喜三年十月十三日」の付記があり、その夜作者は自宅の軒先の庭に阿弥陀仏が立った夢を見たというのである。何らかの吉報の暗示を記したのであろうか。

当該日記には自作の物語については言うに及ばず、物語歌合などへの関心もいっさい記されず、幼い頃の『源氏物語』（以下『源氏』と略称）への熱狂は反転して、深い後悔に沈む後半生が刻まれている。

しかし、稲賀敬二は『寝覚』『浜松』（略称を用いる）が孝標女作の物語であるとの確信から、当該物語歌合にも何らかの関わりがあったとみて、次のような憶測を発している。[注(3)]

> 祐子内親王のところへ出入りしていた菅原孝標女も物語作成候補者リストにはあったのだが、にぎやかな所へ出るのが苦手な彼女は、結局、作品を提出しなかった。〝遅れてもでもいい、提出するように〟と言っても出さない。彼女が『夜の寝覚』を完成したのは数年後のことだった。

稲賀氏の見解では当該物語歌合の開催と孝標女による『寝覚』の執筆開始が連動していたことになる。もしそうだとすれば、『寝覚』の現存巻五巻末の閉じ目が、巻一冒頭の「寝覚めの御仲らひ」とも呼応して、「夜の寝覚絶ゆる世なくとぞ」と、いちおうの結末、物語展開の区切りとなる文

辞を配するけれども、小学館新編全集（鈴木一雄校注）の頭注が説明するように「さらに悲劇を進展させ得る構えともいえよう。巻一の天人の予言はここに確認され、なおも深刻化する可能性を残すのである。」（五四六頁）と、さらに書き継ぐ姿勢を見せつつ、ひと段落を着けたとすれば、[注(4)]この結末は、発表用のためのひと括りであったのではないかとも理解されてくる。

だが、しかし、例えば宣旨の提出物語『玉藻に遊ぶ権大納言』（一番右）は、物語歌集である『風葉和歌集』（以下『風葉集』と略称）に十三首採歌され主人公権大納言も関白となっているところから、完成形は短篇物語とは言い難く、物語歌合当日にはその初巻のみが発表され、のちに書き継ぎ長篇化したと考えるのが穏当で、『寝覚』もそうした成立過程をたどったとしても、現存五巻に加え、故関白との結婚生活を内容とする中間欠巻部が現存巻二と巻三との間に存したことが知られているので、現存巻五の結末に至る物語だけであっても既に相当な分量の長篇物語であって、当該物語歌合に提出された物語の多くが当夜の趣向に合わせた短篇であったようだから、[注(5)]『寝覚』が巻一冒頭からこの場に馴染まない長篇物語の様相を呈していることは（後述する）、当物語に当該物語歌合への提出を前提とするかのような制作の契機があったとは疑問にならざるを得ないのである。

しかも稲賀氏の論拠となる『寝覚』康平三（一〇六〇）年成立説では関白左大臣藤原頼通の息師実の官職経歴に着目して、天喜四（一〇五六）年十月、十五歳で権中納言兼中将となった異例の昇進が、『寝覚』の男主人公の「権中納言にて中将かけ給へる」（巻一）に反映していることを前提とするから、[注(6)]天喜三（一〇五五）年の当該物語歌合の開催時期より後の師実の官職を摂り入れることは不可能で、『寝覚』の執筆開始時期は微妙にズレて、両者の関連性への言及は有効な根拠を失うことになってしまう。

本稿は稲賀氏の『寝覚』康平三（一〇六〇）年成立説を首肯しつつも、摂関家の頼通が後援する当該物語歌合開催の目的等を再検討して『寝覚』成立の可能性を探るものである。

## 二　頼通による物語蒐集

頼通が長久・永承（一〇四〇～五三）年間において、『赤染衛門集』（巻末に「関白殿に集ども集めさせ給ふ」とある）を初めとする私家集蒐集を熱心にこころみていたことは周知されている。稲賀氏が推察するように、当然それが物語蒐集への方向にも触手が動いた成果となると、一条朝期大斎院選子内親王のもとで活発化した「物語司」（『大斎院前の御集』。物語の収集、書写、改作作業にとどまったようだ）を進化させての催事となり、斎院である禖子内親王家での当該物語歌合の開催が史的展開としても最も意義深いことになるはずである。

当該物語歌合は、とりわけ頼通の歌合集成事業（十巻本『類聚歌合』は頼通の在世中の編纂と推定される）とも関わって歌合と物語の融合という画期的形態であり、物語創作に女房が集団営為ではなく個人として主体的に関わるという面からしても、記録上は一回性の催事として浮上しているにすぎないが、物語創作が多くの宮仕え女房たちにとって容易な作業であるはずもなく、一朝一夕な成果として十八篇もの新作物語が提出された訳でもない。[注(7)]長年の育成の結果として、女房同士が自由に競い合う土壌があって、この場では選び抜かれた物語作者としての名が評価されるに至っている。

当夜おそらく後座の御簾中に控えていた頼通が当該催事の進行に口を挟んで小弁の遅参を待った理由に、「かの弁が物語は見どころなどやあらむ」（『後拾遺集』巻十五、雑一、八七五の詞書）として、[注(8)]物語内容への関心が「か

の」によって女房の誰が作った物語なのかまで、つまりその物語の作者にまで至って認識され評価されている点を看過すべきではないのである。物語作者であることの匿名性は失なわれ、[注(9)]宮仕え女房でありながら突出した書き手となった紫式部の時代の物語作者への偏見に根差す誹謗中傷や蔑視あるいは揶揄の洗礼から隔世の状況を浮かび上がらせて、この物語歌合が個々の物語をその作者とともに、いわば歌人・歌作並みに格上げするという基盤が築かれていたことを証するのである。

こうして小弁は無事に『岩垣沼の中将』を六番左方（後半開始の一番手か）として提出することができた。この物語は期待通りの評価を得たようで「岩垣沼のがり」（＝岩垣沼の作者のもとへ）とする章子中宮の女房である出羽弁との贈答歌二組四首が残されている（廿巻本『類聚歌合』付載）。[注(10)]

この出羽弁は、五番左に『あらば逢ふ夜のと歎く民部卿』（以下『あらば逢ふ夜』と略称）を提出しているが、たんに一介の物語作者として参加したのではなく、全体的なとりまとめ役として頼通が信頼の置ける出羽弁を物語歌合の企画段階から送り込んだのだとすれば、[注(11)]右方の物語題名が宮の少将作『よそふる恋の一巻』（二番右）とか甲斐作『淀の沢水』（四番右）等とが混在し不揃いなのに対し、左方の物語題名は九篇全てが〈和歌的表現による主題的提示 ＋ 官職名〉となって統一されているところからしても、[注(12)]少なくみても左の方人頭としての手腕力量発揮とも考えられ、これが歌合形式という場で物語内容を素早く告知するための工夫として出羽弁の指示ないし仕掛けだとすれば、左方チーフとして「岩垣沼のがり」贈答歌の存在も合点がいこうと思われる。ここにあらためて後半の贈答歌一組を掲げることとする。[注(13)]

ひきすぐしいはがきぬまのあやめぐさおもひしらずもけふにあふかな

返し

君をこそひかりとおふにあやめぐさひきのこすねをかけずもあらなむ

小弁の「ひきすぐし」歌は、前掲「かの弁が物語は」の『後拾遺集』歌（但し初句は「引き捨つる」）で、今日の物語歌合での意想外の頼通による恩顧に与って感激と安堵を隠せない小弁の心中を披瀝している。その返しとなる出羽弁歌は、小弁を「君」として「ひかり」と讃え、物語作者として栄誉に浴したのだから、本日提出した『岩垣沼の中将』以外のあなたが創作した物語を外に出さずに（＝この機会に評判となった小弁の他の物語を読みたいとの頼みに応じて、女房たちに貸し出してしまわずに）手元に残しておいてほしいとの意に解していけば、頼通の出羽弁への密命が左の方人頭程度のとりまとめ役にとどまらず、当夜の物語歌合における短篇物語の中から秀逸な物語を選りすぐり物語を集める目的・所為であったのではないかと思われてくる。それが稲賀氏の言う出羽弁による第一次集成の『堤中納言物語』（もちろんこの時点では当物語呼称は存在しなかったが）であったのであろうし、当該物語歌合からは小式部作の『逢坂越えぬ権中納言』（八番左）が選ばれたのだろう。

しかし、出羽弁による短篇物語の収集作業は中断を余儀なくされ、それ以上は進まなかった。その理由の一つは、出羽弁はあくまで後冷泉天皇中宮章子内親王の女房であり、その背後には内親王の祖母であり伯母でもある女院彰子が居たからに他ならない。おそらく彰子の圧力によって、頼通の指揮下で出羽弁によって進められていた物語収集が頓挫したのであろう。そればかりではなかった。出羽弁は『栄花物語』続篇の作者にも擬せら

れるようで、確かに巻三十一「殿上の花見」から巻三十六「根合」にかけての計六巻には章子内親王方の記述とともに出羽弁の名が頻出し、歌も二十余首収められている。

ところが、巻三十六「根合」の最後の記事は、天喜四（一〇五六）年四月三十日の催事である皇后宮寛子春秋歌合であり、列席した女房の衣装まで詳細に記録されている。それに対し、天喜三（一〇五五）年開催の当該物語歌合については、次巻三十七「けぶりの後」の冒頭部に以下の如く極めて簡略に記述されるに過ぎないのである。

物語合とて、今新しく作りて、左右方わきて、二十人合などせさせたまひて、いとをかしかりけり。（③四〇二頁）

年次の前後矛盾は、新編全集頭注（③四〇二頁）が指摘する禖子斎院退下記事との関連という別種の論理による記事の配置転換かもしれないが、物語歌合に参加したばかりではなく重責を荷ったとりまとめ役に注力した出羽弁が情報提供者であれば、『後拾遺集』八七五の詞書と同じく「物語合」や「二十人合」などという曖昧で概略な表現を許容するはずもなく、巻三十六「根合」の巻末における非難を覚悟しての書く行為への苦衷を述べる跋文の存在により、少なくとも巻三十七「けぶりの後」の執筆者は別人に交替していることは明らかであろう。[注14]

しかも、斎院禖子内親王家での当該物語歌合が、天徳内裏歌合の形式を踏襲し、格式ある晴儀歌合を装う意図を解消するかのように、『栄花』は前掲巻三十七「けぶりの後」の引用本文に続けて「明暮御心地を悩ませたまひて、果は御心もたがはせたまひて、いと恐ろしきことを思し嘆かせたまふ。」と記して、まるで病悩の斎院の慰め事程度に貶めてしまっている。[注15]いわば、伝統的な歌合の系列から除外される粋狂な「物語合」という催事が斎院で行なわれたに過ぎないことになってしまっていると言ってよいだろう。

このような巻三十七「けぶりの後」の記述はともかくとして、巻三十六「根合」における天喜三（一〇五五）年の当該物語歌合に代わる天喜四（一〇五六）年の寛子春秋歌合の掲出が、頼通の実娘寛子皇后に寄せる一途な鐘愛による豹変というよりも、女院彰子との確執の板挟みとなり犠牲となった出羽弁の苦肉の所為である可能性を考えた方が実情に合致するかもしれない。

というのも、寛子春秋歌合に関して『四条宮下野集』には寛子の女房下野の二首に替わって彰子家の女房である伊勢大輔歌が三首選ばれることになったのは、彰子の圧力のよってくるところだが、そうした裏事情は『栄花』はもちろん記していない。がことは、後冷泉朝後宮文化圏の協調融和的な関係性が崩れる象徴的現象として頼通・彰子の両者から格別の信任を得ていた出羽弁の動向、その出処進退（もし斎院出羽が出羽弁その人だったら）が『栄花』巻三十六「根合」巻末跋文によって再び問われることになるとすれば、文化サロンの経営が時の権力者によって左右され歪められるという由由しき問題が胚胎することになる。[注16]加えて他家との女房交流が盛んで、文化サロンの支柱となっていた斎院禖子の仮構の病状悪化による退下（天喜六〈一〇五八〉年）にともなって、頼通が主導する物語蒐集も以後萎縮せざるを得なくなったのだろう。

しかし、晴儀歌合を企画できる文化サロンの一翼が崩れたかといって、姉の祐子内親王は高倉一宮として頼通の膝下で鐘愛されていたのであり、幸いにも出羽弁が当該物語歌合十八篇の新作物語から小式部作の『逢坂越えぬ権中納言』を選び残したことは、それが紛れもなく頼通側に寄り添っ

た物語内容であったからなのであろうか。

井上新子は『逢坂越えぬ』（以下略称）について、主人公権中納言の年齢を「御年のほどぞ二十に一二ばかりあまりたまふらむ」と二十代前半の設定としたのは、当該物語歌合の実質的主催者である頼通が十八歳から二十二歳まで、つまり寛弘六（一〇〇九）年（三月四日任。同日左衛門督）から長和二（一〇一三）年までの期間、権中納言であったのであり、摂関家嫡男としては珍しい若き権中納言時代の頼通を思い起こさせるとし、しかも当時は一条朝末から三条朝にかけてで、同腹の姉妹である彰子や妍子が順次中宮であったのだから、物語の中宮との人物関係も合致して栄華の典型的な構図を現出させているとした。[注17]

さらに物語中で蔵人少将が左右の菖蒲の根の優劣を取り成した詠歌[注18]「いづれともいかがわ**くべき**あやめ草**おなじよどの**に生ふる根なれば」が、次のような『御堂関白集』にみえる妍子（尚侍）と道長の贈答歌の表現を踏んでいるとした。[注19]

尚侍の殿より薬玉に

長き世の例（ためし）に引けばあやめ草**同じよどの**は離れざりけり（五七）

御返事

降り立ちて引けるあやめのねを見てぞ今日より**長き例**（ためし）とも知る（五八）

次女妍子からの贈歌「長き世の」歌の第五句が本来は『新千載和歌集』（巻二十、慶賀、二三二〇）『新後拾遺和歌集』（巻三、夏、二〇三）の如く「**わかれざりけり**」であったとすれば、その意は「同じ淀野から引いてきた菖蒲の根は優劣の区別がつかない」となり、「一首は、作者妍子が菖蒲の根の長さに道長の寿命の長さと繁栄とを託し、父への賀の心を表した歌として捉えられる」わけである。そこで井上氏は『逢坂越えぬ』に関して次のように結論づけたのである。

男主人公の設定に若き日の頼通の経歴が反映し、作中の和歌に妍子が道長の長寿と繁栄とを祝った詠歌が踏まえられたことは、道長から頼通へと受け継がれた一門の栄華の歴史を多分に意識した趣向ではなかったか。

かくして『逢坂越えぬ』は、歌合での賀歌に準じた〈賀の物語〉としての特異な相貌を呈することになる。しかし、そもそも蔵人少将の「いづれとも」歌を導いた物語歌合歌である「君が世のながきためしにあやめぐさちひろにあまるねをぞ引きつる」（八番左。傍線久下）は、他の披講された物語歌とは異質で、主人公権中納言の「逢坂越えぬ」宮の姫君との恋を主題とする題号を提示しながら、それとは全く関係のない作中の歌合歌であり、そこには左方の意図的な場への祝賀性が既に汲み取れよう。

ところで、寺本直彦は左方を主導する出羽弁の『あらば逢ふ夜』（五番左）にも「院の姫宮の根合の歌」（『風葉集』巻三、夏、一六八の詞書）とする「君が代にひき比べたるあやめ草これをぞ長きためしとは見る」（一六八）があり、『逢坂越えぬ』の「君が世の」歌との表現上の類似に関して前掲贈答歌における道長の返歌「降り立ちて」歌をともに本歌とするからだとしていた。[注20]出羽弁はひとり小式部に指示していた訳ではなく自らも協同歩調をとって当該物語歌合における関白頼通への祝賀性を盛り上げていたのだといえよう。

因みに、引いたあやめ草を「長きためし」とする表現は、『寝覚』の先行物語として位置づけられる孝標女作の『朝倉』にも三条院が皇后宮（朝倉君の娘か）に「いみじう長き根」に添えて贈った歌「あやめ草深き入江

を尋ねつつ長きためしに今日は引くかな」（『風葉集』巻三、夏、一七〇）があり、同じ祐子内親王家文化圏の営為として注意されるところである。[注21]

ともかく当該物語歌合の実質的主催者ともいえる頼通にむかって父道長と妹妍子の贈答歌を踏まえる物語構図は関心興味を引くことには違いないが、頼通周辺の人間関係におし拡げていくと、三条院后妍子所生の禎子内親王は頼通養女嫄子女王（禖子の母で定子腹敦康親王女）の後朱雀天皇入内によって、皇后に格上げされたものの、禎子と後朱雀との仲は遠ざけられる事態となった。再び後冷泉天皇への寛子の強引な入内によって中宮章子内親王（後一条天皇中宮威子〈道長三女〉所生）との間に軋轢を生じた。[注22]

それは、ひいては章子を鐘愛する彰子や異母弟頼宗の娘延子あるいは実弟教通の入内させた娘たち、生子（後朱雀天皇女御）や歓子（後冷泉天皇女御）の立后問題での落胆・遺恨等が重なり、「頼通とその一門」（寺本論考）といっても寛子はむろんのこと、祐子・禖子両内親王及び頼通の義弟で猶子でもあり、禖子の家司となった源師房（村上源氏・具平親王息）といった頼通膝下の限定的な人々であり、もはや道長一統としてまとまる一枚岩としての後宮政策ではあり得なくなってしまっていた。しかも頼通の近親は正妻隆姫をはじめ中務宮具平親王の血族で占められている実状を看過すべきではない。いわばこうした人間関係を見据えることになるはずで、道長の栄華を継承するのが嫡子のみに与えられた特権であるかのような祝賀性に内包する矛盾を開示することになれば、物語あるいは物語作者は表現上の虚飾にどれほど耐えられるのか。

とりあえず、こうした問題を孕む歴史事象をひとまず脇に置いて元に戻すと、左方の出羽弁を中心とする当該物語歌合への取り組む姿勢が頼通への祝賀という顕著な方向性がうかがえる中で、祐子内親王家の女房である小式部が物語の主人公権中納言に頼通のイメージを摂り入れた方法と同じく、『寝覚』の男主人公の官職設定に頼通の嫡子師実を想定させたことは、藤原摂関家の正統な継承譜を道長→頼通→師実と位置づけるための〈賀〉の物語史構築を目論む痕跡とも考えられよう。が、だとすれば、一方で背景に退いてしまった『逢坂越えぬ』の主題となるはずの宮の姫君への権中納言の逡巡する恋の局面をどう理会すればよいのだろうか。

『逢坂越えぬ』は短篇物語ゆえの手法で、権中納言と宮の姫君との恋の行方を放置したまま終えるが、現実の頼通が権中納言となった寛弘六（一〇〇九）年には具平親王家の長女隆姫との婚姻交渉が具体的な展開をみせ始めたはずなのである。

『御堂関白集』には前掲妍子・道長贈答歌の次に頼通・隆姫（代詠）の贈答歌が配置されていて、頼通の贈歌は「左衛門督殿の、北の方にはじめてつかはす／降り立ちて今日は引くにもかからねばあやめのねさへなべてなるかな」（五九）となっていて、これを本文のまま信じれば、頼通が権中納言兼左衛門督となった寛弘六（一〇〇九）年の五月五日、菖蒲の節句当日に初めて隆姫へ求婚歌を贈ったことになり、例の『紫式部日記』で道長が紫式部に中務宮具平親王家との縁談で相談した寛弘五（一〇〇八）年十月中旬頃からだいぶ時間の経過がみられ、この結婚の進捗がいっこうにはかどらなかった状況が浮かび上がり、物語中の主人公権中納言と宮の姫君との関係性に呼応するかのようである。

ほぼ半世紀前にもなろうとする当該物語歌合において中務宮具平親王家と頼通との縁談が物語の話材（モチーフ）になり得るのは、禖子内親王の母である嫄子女王が具平親王の次女所生であって、頼通の正室隆姫と姉妹であったという関係がもたらしたのだと割り切ることもまた根拠として薄弱なので

あろう。

ところが、『逢坂越えぬ』以上に明示的なのが題号に「中務の宮」を表示する一番左の『霞へだつる』であり、中務宮の姫君に思いを寄せる左大将の実らぬ恋の嘆きを描く物語となっている。その左大将に思わぬ帝の姫宮降嫁の話がふってわいたのは管絃の宴で「月の都もひとつ」（『風葉集』巻十七、雑二、一三二七）にした笛の賞であったとは、樋口芳麻呂・神野藤昭夫（前掲注(8)論考）の推論であるが、その一件がさらに左大将を窮地に追い込み「うき身をかぎる」（『風葉集』巻十六、雑一、一一八二）春の暮れが訪れたという一途で清廉な左大将の恋が主題となっていて、題号に暗示する宮中から隔たった山の麓で穏やかに隠棲する居宅となる中務宮邸が遠景に退いている点、逆パターンではあるが、『逢坂越えぬ』と軌を一にした設定だといえよう。[注(23)]

また主人公左大将の映像（イメージ）に当時左大将であった頼通の実弟教通が想定（樋口論考）できるとすれば、具平親王の三女で前斎宮であった嬉子女王との結婚が、当該物語歌合の四年前である永承六（一〇五一）年に実現していたのであるし、その前妻が三条天皇第二皇女の禖子内親王（永承三〈一〇四八〉年閏正月二十九日薨去）であってみれば、左大将の映像に確かに教通を投影できるのである。樋口氏は次のように言う。

> 中務宮の姫君と左大将の恋物語とあれば、読者、とくに禖子内親王家の女房たちなどは、教通と嬉子女王などの恋を脳裏に浮かべる瞬間があるのではなかろうか。すなわち女別当の狙いは、物語の登場人物に親近感を持たせ、人々に微苦笑を誘うために、中務宮の姫君とか左大将を選んだのではなかろうか。

物語発表の場に直結する第一次享受者となる禖子内親王家の女房たちではあるが、具平親王次女を祖母とするのは姉祐子内親王とて変わりないのだから、斎院家の筆頭女房で一番左の有資格者である女別当と親交のある出羽弁との間で何らかの意思疎通により具平親王家に関わる話題性を打ち出す物語提供に小式部ともども協働したのだと言えなくもない。ただ永承六（一〇五一）年当時五十六歳で右大臣兼左大将の教通と斎宮を退下した嬉子女王（四十七歳くらいか）との結婚がどのような意図と経緯によったのかはっきりしないけれど、この結婚が一時延期された事情があったが、それは杉崎重遠が推察するように、寛子皇后冊立により教通女歓子の立后の望みが絶たれたことで、「結婚相手の嬉子女王が当面の対立者頼通の北の方隆姫女王の妹であってみれば、教通の心中釈然たらざるものがあったであろう。」[注(24)]となると、この結婚が教通の願望というよりは、こじれた兄弟間での頼通による懐柔策の一環であったとの認識が妥当であり、『栄花』（巻三十六、根合）が「まことや右の大殿はつひに殿の斎宮におはしましぬ。ねびさせたまへれど、心ざし浅からでおはします。」（③三七五頁。傍点久下）と記すのも、頼通の後見がみてとれ、そうした背景がうかがわれよう。

だがしかし、それも頼通が関白職を退き譲る時期をむかえると、師実に嗣がせたい頼通と実弟教通との間に反目が生じ、その確執は再び顕在化した。この関白後継問題に関しては、家長である女院彰子が故道長の遺言をもち出して（『古事談』）、まずは教通が関白職を嗣ぐこととなった。[注(25)]

それは、治暦四（一〇六八）年四月十七日のことであり、同日皇太后禎子内親王を太皇太后、中宮章子内親王を皇太后、皇后藤原寛子を中宮、女御藤原歓子を皇后とした（『一代要記』）。また同月十九日には後冷泉天皇崩御にともない、尊仁親王（後三条天皇）が践祚した（『本朝世紀』）。

ともかく左大将としての教通の映像（イメージ）が、中務宮具平親王の三女嫄子女王との結婚とも相俟て『霞へだつる』に定着することの意義は、平安後期の物語史にとって重要で、『浜松』では主人公中納言の母の再婚相手が左大将であったという人物設定に関してはその存在性に理由づけはできないけれども、『寝覚』においては女主人公中の君（源氏太政大臣女）の最初の結婚相手が老関白として知られているが、その関白職は兄（男主人公の父）からの移譲と推定でき、また結婚当初は左大将（中間欠巻部）であり、しかも後妻（前妻の連れ子がいた。生子・歓子は公任女所生）であった。つまり、『寝覚』では教通の映像（イメージ）が左大将から関白へと引き継がれているといえ、このことが『寝覚』の成立時期とどう関わることになるのか、課題の一つとなる。

一方、『寝覚』の男主人公権中納言は関白左大臣の嫡子であり、大納言→内大臣→関白と栄進する。師実も関白左大臣の頼通を父として、康平元（一〇五八）年四月十七歳で権大納言となり、康平三（一〇六〇）年七月には十九歳の内大臣で、父頼通が左大臣を辞し、右大臣教通が左大臣に、内大臣頼宗が右大臣に移ったことでの昇進となる。因みに師実が教通の後関白となるのは、承保二（一〇七五）年十月十五日であり、承保元（一〇七四）年二月二日には頼通（八十三歳）、同年十月三日には彰子（八十七歳）が、翌承保二（一〇七五）年九月二十五日に教通（八十歳）が既に没していた。

ということで、『寝覚』では男女主人公周辺の人物関係構図や官職昇進の経過が、実社会の教通、師実を取り囲む歴史的事象と極めて近似しているのであり、また女主人公の身に起こる准后宣下についても既に稲賀前掲論考に指摘があり、物語の創作方法として摂り込む歴史的事象や背景さらには作中人物の映像（イメージ）には孝標女が仕えた主人筋に当たる人間関係や官職が反映されているのだといえよう。その方法は『寝覚』に先行して成立した当該物語歌合に提出された小式部作『逢坂越えぬ』、女別当作『霞へだつる』、そして出羽弁作『あらば逢ふ夜』に顕著であった。

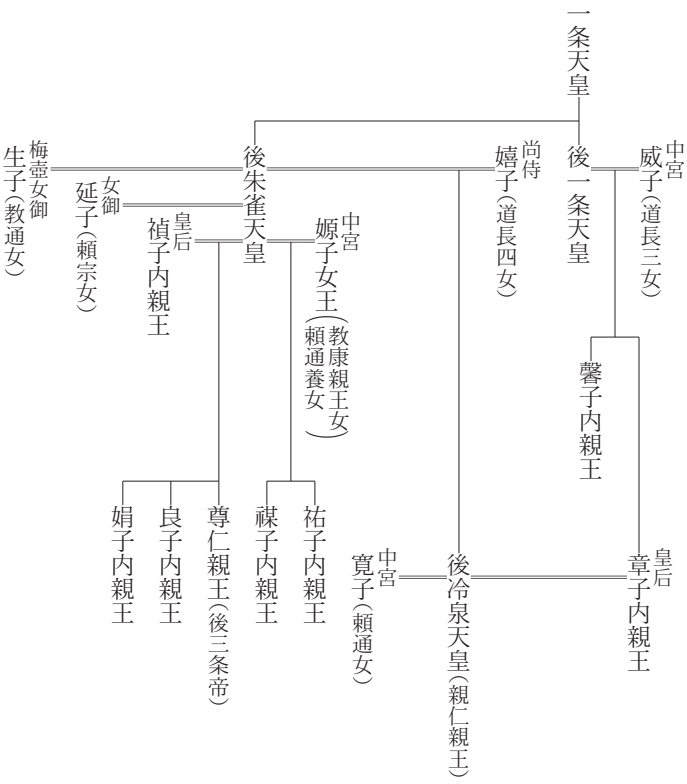
さらに付け加えて言えば、『あらば逢ふ夜』に関しての前掲拙論(A)では、主人公の民部卿の映像（イメージ）に頼通の末弟である中宮大夫長家（次妻明子腹だが、正室倫子の猶子となる）が関わることを述べたが、前掲寺本論考には『あらば逢ふ夜』の作中歌三首（うち「君が代に」歌は既述）が妍子・道長贈答歌と同じように類似表現を抱えていることが指摘されているので、いま改めて掲出しておくこととする。

それは嫄子入内後、後朱雀天皇と禎子皇后とが交した贈答歌のうち帝の贈歌「あやめ草かけし袂のねを絶えてさらにこひぢにまよふころかな」（『後拾遺集』巻十三、恋三、七一五）が、『あらば逢ふ夜』の「あやめ草かかる袂のせばきかなまたしらぬまの深き根なれば」（『風葉集』巻三、夏、一六九）と「あやめ草」「根」「袂」「かけ」の表現類似により深き恋路を意味する関係性において、また麗景殿延子入内の際に後朱雀天皇と梅壺女御生子との贈答歌のうち生子の返歌「青柳のいと乱れたるこの頃は一筋にしも思ひよられず」（『栄花』巻三十四、暮まつ星。『新古今集』巻十四、恋四、一二五一）が、『あらば逢ふ夜』の「常よりもいとど乱るる青柳はもと見し人に心よるらし」（『風葉集』巻一、春上、五八）と、乱れる青柳を他の女人に心を寄せているからとする詠出に共通点を見出していた。[注(26)]これら二首の類似は既に検討した「君が代に」歌とは違って、新たに入内した女人によって後宮が混乱する要因となっていることを示唆する引用とも考えられようか。

確かに『逢坂越えぬ』を〈賀〉の物語とする井上氏の考え方は一つの表

現「長きためし」に支えられているばかりではなく、女房参加を前提とする村上朝の天徳四（九六〇）年内裏歌合を範とする晴儀歌合の復活と合わせて、物語作者としての女房を歌合の方人としてそのまま位置づける革新的な催事が、[注27]関白左大臣頼通の指示によって形となった当該物語歌合の開催意義は測りしれないから、祝意をもって敬するのは当然だとはいえ、『逢坂越えぬ』における内裏での根合では、[注28]中宮主催で公卿・殿上人をまき込んで女房たちが過熱する様子が描かれるのに対し、一方天皇が置き去りにされ、皇権が蔑ろにされている物語内容を含むので、[注29]頼通政権下の摂関体制の内情を告発しているともいえるのである。

〈系図〉




このような批判的な眼差は、『栄花』（巻三十一「殿上の花見」～巻三十六「根合」）の記述姿勢と共有しているのであり、『あらば逢ふ夜』の作者である出羽弁としては、嫄子入内後の後朱雀天皇の他の后妃に関して穏やかならぬ状況認識があって、後冷泉朝後宮におけるみずからの主人である中宮章子内親王の心情を忖度、憂慮しての動機、所為であったにしても、それが出羽弁の出処進退を左右することになったばかりではなく、頼通のすすめる物語蒐集や歌合編纂事業へも少なからぬ影響を及ぼすことになったのではないかと、彰子の圧力以外の要因を想定してみたのである。[注30]

ともかく摂関家を頂点としてその周辺に仕える女房作者にとって、身辺に生起する歴史的事象を虚構の物語に摂り入れることが、後期物語の創作手法として定着していることを示したが、次節ではもう一つの創作方法である『源氏物語』摂取について再確認しておきたい。

## 三　『源氏物語』摂取

『源氏物語』（以下『源氏』と略称）摂取の様相について前節で採り挙げた『逢坂越えぬ』『霞へだつる』を確認し、加えて宣旨作『玉藻に遊ぶ権大納言』（一番右）の検討に入り、『寝覚』の創作手法との一致や相異について『源氏』摂取の問題を考えていくこととする。

まず『逢坂越えぬ』の主人公中納言の人物造型が優柔不断な薫型であることは、夙に言われていることであり、さらに次のような宮の姫君へ身近に迫っての求愛においても具体的な表現上の引用によって『源氏』の特定場面を指向させ認知できるようになっている。周知されている本文だが、いちおう確認のため掲出しておく。

おぼしまどひたるさま心ぐるしければ、「身のほど知らず、なめげにはよも御覧ぜられじ。**ただ一声を**」と言ひもやらず、涙のこぼるゝさまぞ、さまよき人もなかりける。（九〇頁）

突然襲われた姫宮は惑乱状態で「たゞ一声を」との男の切望もむなしいが、この場面は『源氏』若菜下巻において、柏木が女三の宮に迫って告白することばに「かくおほけなきさまを御覧ぜられぬるも、かつはいと思ひやりなく恥づかしければ、罪重き心もさらにはべるまじ」（④二二五頁）と、女の恐怖心をいくらかでも和らげようとする言辞で、実事なき逢瀬場面の定石的口上となっていくが、男の自制による理不尽な契りを回避しようとする「身のほど知らず、なめげにはよも御覧ぜられじ。」が、措辞をそのまま踏襲した訳ではないにしても、その内容は一致して対応することになろう。これに次いで柏木は「あはれとだにのたまはせば、それをうけたまはりてまかでなむ」と言う。これが「ただ一声を」に当り簡略に言い換えたという体となろう。

また竹河巻では、夕霧の息蔵人少将が玉鬘大君への懸想文に「あはれと思ふ、とばかりだに一言のたまはせば、それにかけとどめられて、しばしもながらへやせん」（⑤八九頁）と記すから、『逢坂越えぬ』の「たゞ一声を」は最後に「あはれ」の一言をせめて望む男の切ない恋情の呻きに似たことばとして理会され、その水脈に位置づけられよう。それにしても中納言の「涙のこぼるゝさま」とは、柏木や蔵人少将に比べてさらなる男の軟弱性を露呈しているともいえよう。

次に『霞へだつる』だが、宮中から離れた山里に隠栖している宮家の設定とその様相から宇治十帖の八の宮を想起させるとのことは、小木喬を[注(31)]はじめ前掲樋口・神野藤両論考において指摘されている。とりわけ神野藤論考では「左大将と中務宮とその姫君との関係が、薫と八の宮と大君との関係に重なり合うこと」に加えて、左大将の笛の賞として帝の女宮の降嫁を導き、『源氏』では薫にとって大君思慕と女二の宮降嫁とをせめぎ合う関係とはしなかったのに対し、『霞へだつる』では「左大将が中務宮の姫君への思慕と帝の女宮の降嫁の話との間で苦しむというふうに結びつけ主題化したのではあるまいか。」と推察したのであった。そうだとすれば、『霞へだつる』は『源氏』の登場人物関係構図の単なる引き写しを試みているばかりではなく、薫との関わりから女宮降嫁を絡めてさらに複雑な左大将の恋模様に仕立て上げているのだといえよう。

以上のように、特定の場面構造の中で表現の類似を構築したり、また人物関係構図において直接の対応相手でなくとも同じ物語展開の中で生起した事象を関連づけたりすることをも『源氏』摂取の概念に収め、全く同語句の引用レベルではなくとも包含して検討することにしたい。

そこで、当該物語歌合において一番右に提出され、のちの『狭衣物語』作者となる宣旨作の『玉藻に遊ぶ権大納言』だが、題号は宮道高風歌「春の池の玉藻に遊ぶにほどりのあしのいとなき恋もするかな」（『後撰集』巻二、春中、七二）に拠っていて、主人公権大納言の「いと（暇）なき」恋を主題化したらしく、『逢坂越えぬ』や『霞へだつる』の一途な恋物語とは違って複数の女性（一条院女一の宮、冷泉院一品の宮、春宮の母女御）との交渉が知られるが（『風葉集』）、中でも冒頭部に据えられていたらしい「蓬の宮」（『無名草子』）との恋模様が飛鳥井君と同じように物語を通底していたようだ。

それは、当該物語歌合に提出された『玉藻に遊ぶ』の主題性に添う作中

歌「ありあけの**月まつ里**はありやとてうきてもそらにいでにけるかな」は、『源氏』末摘花巻で光源氏の遅い後朝歌への返歌「晴れぬ夜の**月まつ里**をおもひやれおなじ心にながめせずとも」（①二八七頁）と第二句「月まつ里」を共有し、主人公と「蓬の宮」との出逢いの導入になっていたようで、それに加えて末摘花が故常陸宮の姫君であり、その宮邸が蓬や葎が茂る荒廃した環境であったことにも通じ連想させるから、末摘花が「蓬の宮」造型に関わることは明白だといえよう。

しかし、末摘花が醜貌の姫君であって光源氏の落胆と失笑を買ったのとは違い、「蓬の宮」は主人公の心から離れぬ存在の女性となったようだ。『風葉集』（巻十二、恋二、九三六）にその後朝歌が残る。

内侍のかみ見そめて侍りけるあしたに遣はしける　玉藻に遊ぶ関白

越えて後静心なき逢坂をなかなか関のこなたなりせば

当歌は「蓬の宮」と初めて契った後、理想の女性と出逢って落ち着かない主人公の心境が素直に吐露されているとみてよいだろう。「蓬の宮」は詞書にあるように主人公と関係をもった後、尚侍として入内していて、主人公も関白となっているところからすれば、二人の恋は何らかの事情で行き違いとなったようだ（後述する）。このように主人公の恋は、いずれの恋も思うにまかせない不如意な結末をむかえていて、まさに『玉藻に遊ぶ』は『狭衣物語』の前身といえそうな物語なのである。

一方、「蓬の宮」の尚侍としての入内に関しても、『風葉集』（巻十四、恋四、一〇二二）の詞書に「尚侍、心にもあらず内に参り侍りける」とあって、不本意な入内が強いられたようだ。神野藤氏の推論に従えば、主人公と「蓬の宮」との恋が、一条院女一の宮との結婚の障害になると判断した主人公の父親が後見して、朱雀帝の尚侍として、「蓬の宮」を入内させたのだとする。主人公の前から突然その姿を消して行方知れずになった「蓬の宮」と宮中で再会することになる主人公は、二人の関係を元に戻そうと迫るが、「蓬の宮」は朱雀帝の寵愛との間で苦しみ、「板ばさみにあって進退きわまり、ついに宮中を出奔し、出家をする」と、この物語の展開を組み立てている。[注(32)]

尚侍が朱雀帝に愛されたこと及び出家したことは、『風葉集』（巻六、冬、四二九）に朱雀院詠「内侍のかみさま変へて侍りける後、雪の朝に遣はさせ給ひける／あはれとは思ひおこせる片敷きて身もさえわたる雪の夜な夜な」とあって知り得ることなのである。

「蓬の宮」が尚侍となって後宮の妃となり、そこで現出する帝と主人公との三角関係は、物語文学史上では注視すべき事例であり、『うつほ』『源氏』から『玉藻に遊ぶ』『みづからくゆる』を経て、『寝覚』に至る尚侍像の系譜と変容の軌跡に関しては既に拙論があり逐一繰り返さないが、[注(33)]前稿で失念した点で当論において肝要なのは、『源氏』若菜上巻では前掲『後撰集』の宮道高風歌が「玉藻に遊ぶ鴛鴦の声々」（④八一頁）と、尚侍である朧月夜と光源氏との関わりにおいて引かれており、朱雀院の山籠り後、二条宮に帰っていた朧月夜に再会していまなお続く執心を訴えようとする光源氏を夫婦仲の良い鴛鴦の声々が触発するという場面が設定されている。井上新子が言うように『玉藻に遊ぶ』の主人公と「蓬の宮」との関係には、『源氏』の末摘花と朧月夜の物語が前後を繋ぎ合わせ下敷きとなって構想されていよう。[注(34)]

ところで、『寝覚』の尚侍といっても帝と男主人公との板ばさみとなり

三角関係に苦しむ当事者となるのは女主人公寝覚の上だが、尚侍となるのは寝覚の上の継娘、つまり亡き夫関白の先妻の娘であって、寝覚の上は帝からの尚侍就任要請を断わり、身代りとして継娘を入内させたのである。物語文学史上、『玉藻に遊ぶ』『みづからくゆる』を経るといっても、それはほぼ成立上の年代順に過ぎないかもしれないのである。

というのも、『寝覚』の尚侍は、史上の教通二女真子が長久三（一〇四二）年尚侍となり、入内したことを反映している可能性が大きいのであり、『玉藻に遊ぶ』『みづからくゆる』の尚侍は、道長四女尚侍嬉子が万寿二（一〇二五）年に薨じて以来、十七年間尚侍が不在であった時期を想定し、独自に変容をとげた尚侍造型であったとみられるのである。

寝覚の上は尚侍となった継娘にともなって宮中に入った。それが現存巻三以降、帝と男主人公内大臣（中間欠巻部で朱雀院女一の宮降嫁。母大宮の画策を招く）との間で、寝覚の上をめぐって確執が生じ、一方で寝覚の上は男主人公への愛に目覚める契機ともなっていくのである。

それは、男主人公の身に女宮降嫁を加える中間欠巻部を経て『寝覚』にとって巻三は本格的な男女主人公の物語の始動とも言ってよいが、既に物語が始まってから長い年月が経ち、数多くの経験を積んだ女主人公として立ち現われてくるのであり、女主人公をめぐる三角関係の恋物語としては実質的な始まりとはいえ、〈尚侍〉を引き出してくる物語の構造的意味合いからしても、巻一の冒頭部には長篇物語として欠くことのできない『源氏』摂取の様相が奏でられていたことの派生であることに留意しなければならないだろう。

物語の発端をかたどる現存巻一の冒頭部には源氏の太政大臣である父からの訓育として「姉君には琵琶、中の君には箏の琴を教へたてまつりたまふ」（一六頁）と紹介され、姉より中の君の力量が優れていることが告げられ、八月十五夜、十三歳の中の君は夢の中で天人から琵琶を習うこととなる。ここまでででも既に『竹取物語』『うつほ物語』のイメージが折り重なるように積み上げられているとはいえ、やはり『源氏』宇治十帖の初巻橋姫巻で八の宮が姉に琵琶を、妹中の君には箏の琴を教えていたことに符合させながらも、姉大君ではなく妹の中の君が物語の主人公として設営され、せり上げられてゆくことが冒頭部における重要な話素となっている。

そして、それは宿命を負う物語の主人公化として天人が授けたのは琵琶の楽曲や秘技だけではなく、「これ弾きとどめたまひて、国王まで伝へたてまつりたまふばかり」（一八頁）とする予言であり、さらに翌年には「あはれ、あたら、人のいたくものを思ひ、心を乱したまふべき宿世のおはするかな」（二〇頁）と、第二の予言まで下されている。この予言が、野口元大が言うように『源氏』桐壺巻における高麗の相人の予言に匹敵するものではあるけれども、[注(35)]桐壺帝の英断によって「乱れ憂ふること」を回避するため第二皇子の光を臣籍に降下する対応をとることが可能となる二者択一の予言ではなかった。

いわば、外見的な明に対して内面的な暗ともいえ、このような吉と凶とを合わせ持つ予言は、孝標女の『更級日記』においても初瀬詣の代参の僧が夢の中で鏡に写し出された二つの映像、つまり「臥しまろび泣き嘆きたる影」（新編全集三二一頁）と、後宮を思わせる華やいだ女房たちの出衣が几帳からこぼれ出る光景が二つながら示されていたことと対応することになる。

孝標女の将来を予見する吉凶、明暗の光景は、『更級日記』では冒頭に十三歳の時、上総国から上京することが明記され、人生の転機として刻印

し、晩年の述懐では「ただ悲しげなりと見し鏡の影のみたがはぬ、あはれに心憂し。」（三五七頁）と記している箇所を根拠に『更級』成立を前提とすれば、『寝覚』において同じく主人公が十三歳での人生の転機をむかえ、この予言が設定される意図をも自ずから明確となり、第二予言である「ものを思ひ、心を乱したまふべき宿世」のみが実現する可能性に傾くといえよう。

この姉妹は一世の源氏を父とし帥宮女を母とする申し分のない高貴な出自が設定されているのだから、姉との問題は少なからず浮上してくるにしても、「国王まで伝へたてまつりたまふ」の実現は、順当に考えれば中の君が入内し后となる物語であるはずなのである。

ところが、姉の結婚相手である関白左大臣の息である権中納言と中の君が先に契ってしまうのだから、橋姫巻での薫のかいま見時における姉妹の楽器交換の意図がなかなか不分明なのに対し、天人による中の君への琵琶の教授が明確な伏線となって現象しているのである。つまり、「国王まで伝へたてまつりたまふ」という第一予言は、この物語を長篇化に導く言辞であり、天人による琵琶の教授の行末を予期させているにすぎなく、当面の物語の課題は第二予言の方にあり、天人によって選ばれた中の君の宿運、特異な人生史の幕明けであったことを知らしめていたのである。

第二予言がいかなる事件によってもたらされてくるのか。それが男主人公権中納言と中の君（寝覚の君）との突然の出逢いであったのであり、その契機がまた濃密な夕顔巻からの『源氏』取りで成り立っていることに注視することになる。

東に、ただ呉竹ばかりを隔てたる所に、左大臣殿の中納言殿の御乳母の月ごろわづらひけるが、ここに渡りて尼になりにける、訪ひに、それも今日の、いみじく忍びやかにておはしたり。

（巻一。二六頁）

この場面が、夕顔巻の「大弐の乳母のいたくわづらひて尼になりにけるとぶらはむとて、五条なる家たづねておはしたり」（①一三五頁）との文辞の引き写しであることは瞭然で、吉海直人は両者の類似点を①主人公が乳母の見舞いにやってきて、隣家の姫君を発見する。②乳母がともに尼になっている。③乳母子がともに活躍する。④お互いに相手の素姓がわからず、男君は姫君を下の品と誤認する。⑤姫君は方違えや物忌みで偶然そこに居合わせたという設定になっている。との五項目を指摘した。注(36)

もちろん、『源氏』取りばかりではなく、隣家へとかいま見に至る周囲の環境を「竹のもとに歩み寄りたまひて」「こなたもかなたも竹のみしげり合ひて」「こなたも竹多くしげりて」（二八頁）として『竹取物語』を想起させて、「むら雲のなかより望月のさやかなる光を見つけたる心地」（二九頁）と絶世の美女発見を、言わずもがなの「竹取の翁の家にこそかぐや姫はありけれ」を配し、男主人公の驚喜を導くのは、容易な引用の羅列が、読者を合理的な説明なしに納得させ、男女主人公の出逢いを加速させる方法として有効であったからこそと理会せねばならないところなのだが、このかいま見場面を『源氏』橋姫巻で薫が大君、中の君の音楽に興じるところをかいま見る場面と同趣（新編全集頭注説明三〇頁）とするには、寝覚の君は箏の琴を弾くが、男主人公は楽器交換の現場を目撃しないので多少の違和感を生ずることになる。これが第一予言とは関わらないゆきずりのかいま見として男側の論理を導く理由を物語は次のように説明する。

「ゆくりなくあはつけき振舞は、おのづから軽々しきことも出で来るを」と、ありがたくおぼしをさめたる心なれど、我ながらあやしく鎮めがたきを、人の程をこよなき劣りと思ふに、あなづらはしく、「今宵を過ぐしてまた言ひ寄らむ風の便りも、さすがにあるべきやうもなし」とおぼし寄りて、月影のかたに寄りて、やをら入りたまひにけり。（巻一。三〇頁）

常日頃の軽率な行動を戒める自制心が溶解してしまうのは、相手が受領の娘、但馬守の三女との誤解にもとづく、低い身分への侮り、見くびりが男主人公の行動をかりたてているというのである。薫のかいま見が一挙に暴挙へと展開しないのは、そして『逢坂越えぬ』の場合も、相手が高貴な宮の姫君だったからということになる。そうした男の行動原理を支えるのが、雨夜の品定めで関心を抱いた階層ゆえ、夕顔を下の品の女と判断した光源氏にならうのなら、この出逢いの枠組は、『源氏』夕顔巻の場面や表現の表層的な引き写しとも言えなくなるのだろうが。

この突然の契りによって女主人公を苦しめたのは正体も知れない男の胤を宿したことに違いないものの、その後付き人の対の君から真相を聞き、男の素姓が姉の夫となった中納言であったことを知った時の衝撃と驚愕がまさっていた。ここに注目すべき表現を見出したのは池田和臣であった。注(37)

○姫君は、このこと聞きたまひし後、恐ろしく、悲しくおぼされて、「骸をだに残さず、この世になくなりなばや」とおぼし入るに、月ごろ弱りくづほれたまひぬる心地、またあやまりて、音をのみ泣きつつ、頭ももたげたまはず、御帳のうちに沈み入りたまへれば、……（巻一。六一頁。傍線久下）

○姫君は、ただ「いかで、骸をだにとどめず、なくなりなむ」とのみおぼし入るに、いといみじく堪へがたく、弱げになりまさりたまふに……

（巻一。一二〇頁）

傍線部「骸（から）をだに残さず、この世になくなりなばや」「骸（から）をだにとどめず、なくなりなむ」は、入水を決意した浮舟が最後に匂宮に書き送った歌「からをだにうき世の中にとどめずはいづこをはかと君もうらみむ」（浮舟巻。⑥一九四頁）に依る表現とする指摘である。

池田氏は、四十項目に及ぶ『源氏』と『寝覚』との類似点を挙げ、とりわけ浮舟物語との接点が多くあることに留意する。注(38)当該「骸（から）をだに残さず……」に至る前には寝覚の君の美しい髪を「**五重扇を広げたらむやう**に、きよらに多く凝り合ひて、類なくめでたし。」（五九頁）と形容叙すのを、浮舟の「様体をかしく、いまめきたる容貌に、髪は**五重の扇を広げたるやうに**こちたき末つきなり。」（手習巻。⑥三五一頁）との対照で関連づけようとするのは、いかにも浮舟が出家後の尼髪であることからすれば、強引な付会ともなり得ようが、印象的な用語（「骸をだに」「五重扇」）の引用は、埋没しかねない表現内容の重なりを意識させるための手法ともなっているといえる。

というのは、池田氏は寝覚の君の病状を案じた対の君が相談した兄の僧都のことばと、浮舟の重態を気づかった妹尼が修法を懇願した横川僧都のことばとの類同に着目していた。

○なかにもこの姫君は、御よそめいと警策なり。女と申しながらも、前の世のことにより生まれもしたまへると見ゆるものを、かかる不便のことのおはすらむ、むなしくいたづらに捨てられぬものなり。（巻一。六一頁）

○げにいと警策なりける人の御容面かな。功徳の報いにこそかかる容貌にも生ひ出でたまひけめ。いかなる違ひめにてかくそこなはれたまひけん。

両者とも女人の美しい容貌に前世の功徳を思う。がそれなのに思いも寄らない困難に直面し、ひどく苦しみ煩っている現況を僧都たちは見据えていた。池田氏はこれをもって次のようにまとめる。

「からをだに」の引用は孤立してあるのではなく、浮舟を喚起する連続的引用表現のうちにあり、寝覚の君の生が浮舟のそれにつながれていることを、浮舟のおわされた主題をひきついで生かされていることを証しだてるのである。（手習巻。⑥二九三頁）

深刻な状態を言うにしても入水などを考えている訳ではない寝覚の君に「骸をだに残さず（とどめず）」と思念させるのだから、いかにも唐突な表現であるゆえ、再度巻一の巻末（後者の引用箇所）に掲げるのは、これが浮舟物語を前提とする表現であることを是非とも読者に認識させる必要が池田氏の言う浮舟を引き継ぐ主題性であったのかどうか。

この不条理な出逢いの男女関係が第二予言（「あはれ、あたら、人のいたくものを思ひ心を乱したまふべき宿世」）の嚆矢として位置づけられていることが、傍線部「かかる不便のことのおはすらむ」によって確認されているのであって、事件の目撃者となる但馬守の娘（中宮付きの女房となる新少将）が「あはれ、あたら様を、あさましき夢のうちにも紛れたまふかな」（六八頁）との証言も、寝覚の君の悲運をその超絶な美貌と関連づけるところにあったのである。

繰り返し続く悲劇的事象に直面し、そこから逃れられない宿命を負う女主人公の存立が危ぶまれる最初の事件が、まずこうした姉の夫である権中納言との男女関係という形で糸口を切り、そのことが姉妹間の絆の断絶への恐怖心や堪え難い羞恥心が身の存在自体を否定し抹殺する「骸をだに残さず（とどめず）」とする表現に『寝覚』では昇華したのであり、結果的に引用表現の連鎖する浮舟物語から選び取られたことになりはするものの、男女の三角関係の清算としての入水や出家思考の言質を介在させずに『源氏』が終末に行き着いた浮舟物語をはりめぐらしたことの意図を、浮舟の生を引き継ぐ寝覚の君の主題化の次元として捉らえるのではなく、本稿の目的としては、物語形成の方法を考えるところにあって、であるならば、その開始が何故『源氏』の夕顔物語であったのかを問うことが当面の課題なのである。

夕顔物語から浮舟物語への移行が『源氏』内で白のイメージに伴うはかなさの造型継承が確実視できるのとは違って、前掲引用箇所で明らかな如く男主人公の暴挙に及ぶ行動原理を支えるのが、受領の娘への侮りや見くびりであったことの披瀝が、夕顔に対する光源氏の思念に近似するものとしてあったというよりは、むしろ浮舟に対する薫や匂宮の行動や処遇が、浮舟を妻として迎える体ではなく、女房扱いの召人レベルであったことは、八の宮の娘としての結婚をどこまでも願い、その血筋を矜持とする浮舟の母である中将の君とは違い、匂宮にとってはまだしも大君の形代との認識にある薫でさえ浮舟はしょせん常陸介の継娘であるに過ぎなかったという意識が物語展開の随所に顕在化していたのではなかったか。『寝覚』ではそれが男主人公の妹中宮の女房として誤認した但馬守三女を招請する行為となって直叙されている。

夕顔物語からの摂取が、かいま見を導く設定の前掲引用箇所（池田論④）ばかりではなく、⑥対の君が男君を「『なほ、人にはあらぬにや』とむく

つけく」思うところと、源氏が名のりせぬ夕顔に「名のりしたまへ。いとむくつけし」といいかける表現。⑦「白波の寄する渚に世をすぐす海人の子なれば宿も定めず」（和漢朗詠集、下、遊女）をもとにする表現。⑧『寝覚』の但馬守の造型表現が、『源氏』の伊予介と常陸介のそれによっている。との指摘が挙がってはいるが、夕顔物語から浮舟物語への移行、転回の必要性、その核心は、貴族社会の洗礼のままゆきずりの契りが成り立つ男側の身がってな情動の根拠、由来にあったのではなかろうか。その意識の許容が、このかいま見から直に男女関係に至る経過を保障しているのだといえよう。

もちろん夕顔物語の『源氏』での位置を考えれば、当然長篇化構造を担うための設定であるのだけれども、また玉鬘系に連なる物語展開を思えば、思いも寄らないこの契りによって誕生することになる石山の姫君が男主人公のもとで長らく隠し置かれる存在となるから、そうした物語構造とともに、石山の姫君の行末が将来問題となってくるはずである。本稿は序論としてこうした点を指摘するにとどめ、『寝覚』における浮舟物語摂取の有様を池田論の範囲で収束させずにいま少し続けることとする。

前稿（「宇治の浮舟・白河の寝覚」）では、浮舟をめぐる薫・匂宮との三角関係構図に、寝覚の君をめぐる内大臣（男主人公）・冷泉院との三角関係構図が重ねられていることを指摘したが、その内実は浮舟が匂宮を受け入れたのに対して、寝覚の君は冷泉院を拒み通したことで、あらたな執着を生み、「いま一度の逢瀬を、いかでかならず」（巻五。五一五頁）との院の思いは引きずられ、修羅場の主舞台が現存巻三、四、五のいわゆる第三部での後宮から第四部である末尾欠巻部の白河の院へ、舞台は郊外へと移ることになる。つまり、現存巻五巻末は内大臣のもとでいちおうの安らぎを得ることになるものの、依然としてその波乱要因は抱えたままで恋の三角関係構図はそのまま末尾欠巻部に引き継がれることになって、浮舟物語の摂取の有様としても極度に緊迫感が増したのである。

それが、東屋巻において薫が宇治に浮舟を隠し据えたことと、冷泉院が寝覚の君を白河に隠し据えたこととの対応であった。さらに寝覚の君の白河からの脱出行にしても、かくたる資料が残ってはいないが、寝覚の君自身は入水などを考えていなくとも、寝覚の君が突然眼の前から姿を消して行方知れずになってしまったことで、冷泉院が白河への入水死を考えたとしても不自然ではなく、『寝覚物語絵巻』第四図（詞書第三段）によれば、息子真砂の救済（冷泉院の勘当）を懇願する手紙が冷泉院のもとに届けられたことで寝覚の君の生存を知るという場面があるのも寝覚の君の死を前提とすることだから、浮舟の入水死を遺骸なき葬儀によって確実視した薫や匂宮の状況認識や心境に匹敵しよう。

一方、寝覚の君の出家については、その意向は現存巻四で男主人公の正妻朱雀院女一の宮への生霊事件を恥じて以来の念願となっていて、巻五が人物相関構造においては薫とその正妻今上帝女二の宮と浮舟を別宅に迎えた場合の混乱を仮説した物語ともいえるが、むしろその内実は『源氏』第二部若菜上巻以降の光源氏、女三の宮そして紫の上との三者の立場が交錯した状況を生み出していた。

現存巻五では、寝覚の君の出家意思が固まる中で、父入道に出家を願い出る姿は、父朱雀院に出家を懇願する女三の宮の姿に重なり、なお引歌表現「心の闇」（四三七頁。「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」後撰集、雑一、一一〇二、藤原兼輔）が文脈上それを保証していた。

しかし、父入道が石山の姫君と対面した折、「上なき位をきはめたまは

むこと、なにの疑ひあべうもあらぬ人のものしたまひける。」（四七二頁）とする立后の予見が、『源氏』明石入道の瑞夢（若菜上巻）を呼び込み、末尾欠巻部の伏線（新編全集頭注解説）となっていて、そうしたこの世の絆ゆえに出家を思いとどまることになり、寝覚の君の出家断行は末尾欠巻部へと持ち越されるのである。

現存巻一では注意深く入水、出家の言質を排除している浮舟物語摂取の有様からしても、さらにこのように現存巻三、四、五の物語展開を把捉してみれば、末尾欠巻部はその物語形成が、第二世代（石山の姫君、真砂姉弟ら）の活躍と寝覚の君の行き着く先に出家が想定されるという主要登場人物たちの将来が見据えられる物語の必須要件を満たしながら始動していくのであって、前掲野口論のように現存巻五をもってこの物語の主題が達成されているとする読みは早計なのであろうし、また池田論のように現存巻一の浮舟物語摂取の有様をもって、浮舟の主題性を引き継ぐ寝覚の君の生を論ずることも、巻一の浮舟物語摂取が未完であり、本格的な摂取の有様が出現してくるのが、末尾欠巻部においてなのだから、これも慎重な検討を要することとなろう。

末尾欠巻部はその本文散逸のため具体的に内容を確認できないので『寝覚』研究の遅滞を余儀なくしてきたが、近時伝後光厳院筆数葉の『寝覚』断簡出現により急速に個々の事件の関係性が補塡されてきた。それに加えて田中登が紹介する伝慈円筆切の新出断簡（断簡四）もその一つであった。注(39)

1　申さむかたなけれは御心もゆるされてふと申
2　いてんもいとゝはゝかりあれは心はたれか侍らむこ
3　と〳〵しきゝはの人はおもふによに侍らしとこたへ
4　申給へはかのもやにあやしうそらめにやあらむ
5　めつらしきさましたる人のふとみえつるはとの
6　給まゝになみたのさしくみ給をされはよといみ
7　しういとをしけれはこと〳〵にきこえまきらは
8　してやみたまひぬとのはせむさいくうに御たいめ
9　むありて心よりほかになからへすこすやうに侍
10　れとゝをさかりまかるまゝにもいふかひなうなく
11　さめらるゝ時のさもなくいよ〳〵心にものゝおほ
12　えまさられ侍れはかくてもいとなからへにくゝ
13　のとやかにをこなひのかたにおもふきぬへくおもひ

白河から脱出後、寝覚の君がむかったのは広沢（邸）であり、いまは亡き父入道のあと叔母である前斎宮がそこの主となっていた。つまり、広沢で寝覚の君は出家して身を隠していたのである。浮舟物語であれば、蘇生後養生していた小野に当たり、浮舟は横川の僧都によってその地で尼となったのである。薫が浮舟の生存を知ったのは横川の僧都の口から明石の中宮の耳に入ったこと（手習巻）によるが、『寝覚』の場合、前述した如く冷泉院のもとへ届けられた寝覚の君の手紙によって生存が確認され、その情報が直に内大臣や真砂に伝えられたとみてよいであろう。つまり断簡二において真砂がちらと見かけた女人が母寝覚の君でなくとも、広沢へむかう理由は、かつて父入道の隠棲地であった折、寝覚の君にとってたびたび訪れた避難、救済の地であったのだから、内大臣ならば寝覚の君がそこに隠れ住んでいるのではないかとまず疑ってしかるべき地であったのである。

この断簡四の8行目の「とのは」が男主人公内大臣（末尾欠巻部では右大

臣）で前斎宮と対面して、寝覚の君の亡き後、その生き難い苦衷を述べている。当該場面をどう理解すべきかの問題は、その前半であって、いったい誰と誰とが話しをしているのかが不明なのである。

田中氏が想定する断簡四の後を受ける場面と思しき断簡一の本文には、「中納言のたちつゞきたる……（略）……さま〴〵とをくなるまでうちみやられ、……」とあって、寝覚の君との「再会が叶わなかった父子が、悄然とこの邸を立ち去ってゆく後姿を見つめながら悲嘆にくれる」寝覚の君を描いているとみてよいから、広沢を訪れたのが内大臣と中納言真砂の父子二人であったことになる。

となれば、二人で訪れておきながら、父内大臣が前斎宮と対面する一方で、真砂が親しく会話する相手とは誰なのかということである。田中氏は寝覚の君本人とするのだが、女三の宮ではないかとの判断を示したのが大槻福子であった。[注(40)] 女三の宮ならば、父子が共に対面する相手というより真砂の恋人であるのだから、むしろ真砂単独での対面が適当なのであろう。

しかし、だからといってこの対面場面が白河の院だとする大槻氏の考えには従えない。断簡一にも父子二人が帰った後、寝覚の君は「さい宮の御をこなひに御返にいらせ給て、つねよりもをこなひあかし給に、君たちのおもかげは、なを身をはなれず。」とあり、叔母の前斎宮とともに（「御返」は「御供」の誤字か―田中論）勤行に励んでいるのだから、断簡四の場面は白河ではなく広沢と考えるべきであろう。

では何故女三の宮が広沢に居るのかは別に考えるにしても、断簡四の4行目から5行目にかけて、「かのもやにあやしうそらめにやあらむ、めつらしきさましたる人のふとみえつるは」とあるのは、真砂がかつて白河の院を訪れて女三の宮との再会を果した折、「かの母屋」で見かけた女人が母寝覚の君ではなかったのかの真偽を問いただすことが真砂のとりあえずの今回の訪問の目的であったとも考えられなくはない。

白河の院では女三の宮と寝覚の君とは偶然居合わせることになり、親しく心の中をお互いに語り合ううち（前稿の実践女子大切）、二人は助け合うようになったのかもしれない。真砂の冷泉院による勘当事件の情報も女三の宮からもたらされ、恋人と母親の気持ちが重なり寝覚の君がその救済を冷泉院に願い出る手紙につながった経緯が考えられ、また白河での真砂との密会に激怒した冷泉院が仙洞御所に女三の宮を連れ帰る時、その場の混乱に乗じて女三の宮が寝覚の君の脱出を手助けしたとすれば、白河の院での二人の間には深い信頼関係と窮地に陥った女同士の絆が生まれたと考えることができよう。寝覚の君の偽死事件から白河脱出の件までその真相を知り、よき理解者となった女三の宮が寝覚の君によって密かに広沢に招き寄せられていたと考えてもさほど不自然ではなかろう。

それにしても寝覚の君との再会どころか生存の確認さえまともにできなかった父子二人が肩を落として悄然と帰って行く後姿を見送る寝覚の君と、薫の手紙を携え小野を訪れた弟小君を人違いとして会わずにつれなく帰す浮舟との間にはどこか径庭があるようなのだが、距離をおいて訪れない薫の不在ばかりではなさそうである。

このように浮舟物語をベースにした『源氏』取りの様相は、現存巻一の冒頭近くから末尾欠巻部の終末に至るまで『寝覚』に確認できるのである。それはいかにも孝標女の物語らしい作品となっていた。

## 四　序章のおわりに

頼通の新作物語蒐集が天喜三（一〇五五）年に開催された六条斎院禖子内親

王家物語歌合をもって本格的に始動したといってよいが、出羽弁への過度の信頼が、その破綻と挫折を招くこととなってしまったようだ。

しかし、最愛の孫娘である祐子内親王家に仕えていた孝標女に父道長政権下において文化的象徴となった『源氏物語』に比肩するような長篇物語の創作をあらためて依頼したところ、頼通の期待に叶う物語が完成したといちおう言い得る『寝覚』の出来映えであった。

その『寝覚』の長篇化構想には積極的に『源氏』取りの方法を駆使して、最新の女房作者の流行を捉え、細かい表現はむろんのこと、場面構築、人物造型そして構造まで『源氏』との対応関係を重視した目配りは、完璧とも言えるほどの物語の誕生だった。

『源氏』取りが物語の創作手法として注目される一方、もう一つの方法として後宮や宮家に仕える女房たちにとっての共通の関心事となる身近で起こった恋愛事件は言うまでもなく、とりわけ藤原摂関家やその周縁の人々の昇進や結婚動向をつぶさに物語に摂り入れることで、女房好みの物語趣向がさらに先鋭化していったことになる。

このように生きた時代を反映した物語趣向が、平安後期物語の特徴と言えるまでに発展していった。しかし、それは一歩間違えば、主人筋の瑕疵を暴露したり批判したりすることになり、物語にとっても女房作者にとっても危うさを隣り合わせにした創作手法であったといえよう。『寝覚』の存立も例外ではなかったようだ。

注

(1) 樋口芳麻呂『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』(ひたく書房、昭和57〈一九八二〉年)「『朝倉』物語」は、孝標女三十八歳の寛徳二(一〇四五)年十一月以降の執筆とみて、『源氏』を下敷にした処女作であったのではないかとする。

(2) 福家俊幸『更級日記全注釈』(角川学芸出版、平成27〈二〇一五〉年)に女房名が常陸だとする可能性が指摘されている。ただ『更級日記』から窺い知られる宮仕え期間を中野幸一「『更級日記』の形成基盤—孝標女の宮仕体験をめぐって—」(木村正中編『論集日記文学』笠間書院、平成3〈一九九一〉年)に従って、長暦三(一〇三九)年三十二歳の秋冬頃から永承二(一〇四七)年以降、四十歳過ぎまでのほぼ十年ほどであったとすると、既に人選の圏外となっていたかもしれない。

(3) 稲賀敬二コレクション4『後期物語への多彩な視点』(笠間書院、平成19〈二〇〇七〉年)「『堤中納言物語』解説(その3)—十編の集合とその完成まで—」

(4) 野口元大「『夜の寝覚』の主題と構造(上)(下)」(「文学」昭和42〈一九六七〉年4・5月。のち『夜の寝覚研究』笠間書院、平成2〈一九九〇〉年)は、この区切りに関して第三部(現存巻三、四、五)までで主題が完結しているとし、以下続く第四部(末尾欠巻部)はそれまでの主題を放棄した単なる読者奉仕の続編とする。

(5) 五月五日の菖蒲の節句に因んで創作した大和作『菖蒲かたひく権少将』(二番左)、左門作『あやめも知らぬ大将』(三番右)、甲斐作『淀の沢水』(四番右)、讃岐作『菖蒲うらやむ中納言』(五番右)、小式部作『逢坂越えぬ権中納言』(八番左)、小馬作『いはぬに人の』(九番右)がある。だからといって三日に物語歌合、五日に物語合(しかも本番は五日の物語合の方だとする)といった催事を想定する井上新子『堤中納言物語の言語空間—織りなされる言葉と時代—』(翰林書房、平成28〈二〇一六〉年)「天喜三年の「物語歌合」と「物語合」」には賛同しかねる。因みに『寝覚』にはこうした配慮はないが、当該物語歌合の記念碑的物語であり、物語史の中で埋没しかねない斎院方の矜持を示す『狭衣物語』では菖蒲の節句に恋歌を贈る条が巻一冒頭近くにある。

（6）師実が権中納言で左近衛中将を兼ねるのは、十五歳の天喜四（一〇五六）年十月二十九日から十七歳の康平元（一〇五八）年四月二十五日までだが、『栄花』巻三十六「根合」に「まだきより色におはしまして、忍びありきいみじうせさせたまふ。」（③三七五頁）とあり、『寝覚』の男主人公の色好み性とも符合する。

（7）久下『王朝物語文学の研究』（武蔵野書院、平成24〈二〇一二〉年）「民部卿について」では、禖子家で永承三（一〇四八）年から永承六（一〇五一）年まで毎年行われていた歌合が、永承七（一〇五二）年から天喜二（一〇五四）年の三年間は開催されていないのは当該物語歌合の本格的な準備期間に入っているからだと述べた。当論考を拙稿Ⓐとする。

（8）横溝博「六条斎院禖子内親王家「物語合」の復原―『後拾遺和歌集』の詞書の再検討を通して―」（知の遺産シリーズ4『堤中納言物語の新世界』武蔵野書院、平成29〈二〇一七〉年）は、この左方小弁の遅れが、天徳四（九六〇）年内裏歌合を先例とする格式を整えた晴儀歌合となる可能性に言及する。但し偶然なのかそれとも演出なのかの判断を留保した。しかし、神野藤昭夫「散佚物語『霞へだつる中務宮』の復原―六条斎院物語合考断章―」（「跡見学園女子大学国文学科報」21、平成5〈一九九三〉年3月。のち『散逸した物語世界と物語史』若草書房、平成10〈一九九八〉年）に指摘があるように、女別当作『霞へだつる中務宮』（一番左）の歌合歌「ここのへにいとど霞はへだてつつ山のふもとは春めきにけり」の上句は『源氏物語』少女巻の「九重を霞隔つるすみかにも春と告げ来る鶯の声」が物語題号にも絡む引歌だとしても、下句「山のふもとは春めきにけり」は、天徳内裏歌合における一番右の平兼盛歌「ふるさとは春めきにけりみよし野のみかきのはらをかすみこめたり」を踏襲する表現であり、女別当と親交のある出羽弁が意図的に当歌を歌合歌とするよう促したとも考えられるから、小弁の場合も意図的なパフォーマンスの可能性があろう。なお横溝論は『後拾遺集』編纂の意図には目を向けるが、『栄花物語』に対してはそれを顧慮していない。

（9）永井和子「『六条斎院物語歌合』―物語と作者の関係―」（和歌文学論集5『屏風歌と歌合』風間書房、平成7〈一九九五〉年）は、当該物語歌合に関して「物語の匿名性と歌の実名性を同時に満たした形」とする。

（10）この二組の贈答歌に関しては樋口芳麻呂「小弁が物語は見どころなどやあらむ」（『論叢狭衣物語2歴史との往還』新典社、平成13〈二〇〇一〉年）が詳しく検討するが、後述するように後半の一組の解釈に関しては私説と異なるし、そもそもこの二組の贈答歌は当該物語歌合終了後に交わされたと久下は判断している。

（11）久下前掲論考注（7）。なお出羽弁の後一条・後朱雀・後冷泉朝での事蹟や斎院出羽との別人説などは高橋由記「後宮の文化圏における出羽弁」（久下編『考えるシリーズ⑤王朝の歌人たちを考える―交遊の空間』武蔵野書院、平成25〈二〇一三〉年）参照。

（12）横溝博「「物語合」虚構論―十九番目の物語―」（横井孝・久下編『平安後期物語の新研究―寝覚と浜松を考える』新典社、平成21〈二〇〇九〉年）に指摘される。

（13）引用は池田利夫訳注『堤中納言物語』（旧文社文庫）に拠る。

（14）後篇巻三十一「殿上の花見」から巻三十六「根合」までの六巻の担当執筆者を出羽弁とする方が、情報提供者に過ぎないとするよりも合理的と考える。後冷泉天皇及びその後宮への順当な評価と天皇の乳母である弁の典侍賢子（紫式部の娘）への敬意は筆録者の立場・経験・見識等によるところから出羽弁をまず挙げ得る。但し『後拾遺集』『栄花』がともに「物語合」とするのは、これが公式見解なのだろうが、「五月五日」という日付の相違を含めて本稿ではこれ以上深入りしない。

（15）『中右記』永長元（一〇九六）年九月十三日条裏書に「天喜六年、病ニ依リ斎院ヲ退ク。爾ヨリ以来、狂病ニ責メラレ、前後ヲ知ラズ、数十年ヲ経」とある。禖子の斎院退下は天喜六（一〇五八。改元して康平元）年であるが、その後も

歌合を主催しているから、狂病悪化との因果関係に疑義が生ずる。

(16) 犬養廉『平安和歌と日記』(笠間書院、平成16〈二〇〇四〉年)「摂関時代後期の文学潮流—後冷泉朝文壇への照明—」。なお当論は従来からの協調融和的な後冷泉朝後宮文化圏とする認識に疑義を呈している論と久下は読む。

(17) 井上新子前掲書注(5)「〈賀の物語〉の出現—『逢坂越えぬ権中納言』と藤原頼通の周辺—」

(18) 久下「姿を消した「少将」—本文表現史の視界」(『学苑』760、平成16〈二〇〇四〉年1月)及び「『逢坂越えぬ権中納言』を読む」(前掲注(8)『堤中納言物語の新世界』)参照。

(19) 引用は平野由紀子『御堂関白集全釈』(風間書房、平成24〈二〇一二〉年)に拠る。

(20) 寺本直彦「「ほど〳〵の懸想」物語と「あらばあふよのとなげく民部卿」物語—後朱雀院後宮和歌との関連など—」(『青山語文』12、昭和57〈一九八二〉年3月。のち『物語文学論考』風間書房、平成3〈一九九一〉年)

(21) 小式部を祐子内親王家女房とする根拠の一つに『逢坂越えぬ』の巻末歌の中納言詠における薄い「夏ごろも」を逢わぬ隔てとする発想が、『寝覚』巻三の「単衣の関」と共通することを久下前掲「『逢坂越えぬ権中納言』を読む」で指摘した。なお当論には『逢坂越えぬ』の「例は宮に教ふる」と『寝覚』巻三の「例は教へたまふにこそ」の類似表現を指摘した岩波『新大系』を掲げておいた。またいまだ未成熟な寛子皇后後宮サロンよりこの時期最も頼通との距離感で近親する祐子家の女房である小式部に出羽弁は白羽の矢を立てた。その信を置かれた小式部は左方を離脱し右方に心を寄せようとする同僚女房の小弁に対し真意を糺す歌を贈っている(『後拾遺集』巻十五、雑一、八七三)。

(22) 後冷泉天皇主催の永承四(一〇四九)年十一月九日内裏歌合は頼通の後援で一条朝以後四代にわたって途絶えた内裏歌合の復活を目指し京極殿で行なわれた。母屋の南廂に天皇の座、東の間には中宮章子の座(その背後、東廂に女房たち)、西の間の簾中に頼通の座が配されている(『袋草紙』)。その真名日記には「天徳之旧儀に同じ」とあって頼通の目標とする晴儀歌合が村上朝天徳四(九六〇)年内裏歌合であることが知られ、歌合集成事業の実践的成果を築きはじめる。問題はその後の変化である。

(23) 樋口芳麻呂前掲書注(1)「『霞隔つる中務宮』物語」

(24) 杉崎重遠『王朝歌人伝の研究』(新典社、昭和61〈一九八六〉年)「嬉子女王」。一方樋口氏は「但し、頼通・教通の兄弟は、娘(教通女生子・歓子、頼通女寛子)の立后などをめぐって、表面はともかく隠微な対立もあり、そうした微妙な空気を禖子内親王家女房が敏感にかぎ取っていたとしたら、左大将を病重くさせるなどの皮肉な扱いをしないとは限らないかもしれないが。」とも述べる。教通と作者あるいは作者と享受者との関係等で物語の結末が三通りぐらい考えられている。

(25) 久下『源氏物語の記憶—時代との交差』(武蔵野書院、平成29〈二〇一七〉年)「藤原摂関家の家族意識—上東門院彰子の場合—」

(26) 寺本論考には『堤中納言物語』中の一篇『ほどほどの懸想』に後朱雀帝・女御生子贈答歌が摂り入れられていることも指摘している。しかも『ほどほどの懸想』の作者は当該物語歌合に物語を提出した女房たちが有力とまで言い及んでいる。

(27) 山本登朗「類聚歌合巻第八斎院部の改編と禖子内親王物語歌合」(国文学研究資料館編『陽明文庫王朝和歌集影』勉誠出版、平成24〈二〇一二〉年)。なお萩谷朴『平安朝歌合大成三』(同朋舎、九五四・九五六頁)は、永承五(一〇五〇)年六月五日の祐子内親王家歌合での歌人即方人の例を晴儀歌合での最初の例として位置づける。その流れに添う。

(28) 萩谷朴『平安朝歌合大成三』(九七七頁)に菖蒲根合の記録としては永承五(一〇五〇)年五月五日の六条斎院禖子内親王家における催事が現存最古とする指摘があり、翌永承六(一〇五一)年五月五日の内裏根合は、それに刺激された

とする。そうした流行が『逢坂越えぬ』に採り入れられたことからすれば、物語には後冷泉朝期歌合の現況が反映されているといえようか。また永承六（一〇五一）年内裏根合が京極殿で行なわれたからといって後冷泉天皇が頼通等によって永承四（一〇四九）年十一月の内裏歌合におけるほど抑圧されてはいないとの見解を示している（九八一頁）。

(29) 久下前掲注(18)「姿を消した「少将」―本文表現史の視界」

(30) 久下注(7)論考では出羽弁と斎院出羽とが同一人物との認識に傾いていたが、現在では別人と判断しているので論述に若干の相違がある。

(31) 小木喬『散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編』（笠間書院、昭和48〈一九七三〉年）「霞へだつる中務宮」

(32) 神野藤前掲書注(8)「散逸物語『玉藻に遊ぶ権大納言』の復原」

(33) 久下前掲書注(7)「尚侍について」

(34) 井上前掲書注(5)「天喜三年「物語合」提出作品の一傾向―頼通の時代の反映―」

(35) 野口元大「『夜の寝覚』における『源氏物語』―発端部分における意味―」（寺本直彦編『源氏物語とその受容』右文書院、昭和59〈一九八四〉年。のち『夜の寝覚研究』笠間書院、平成2〈一九九〇〉年）。この野口論考では『夜の寝覚』が長篇物語であるとの言及はいっさいなく、それゆえ、長篇物語の体裁を整えるための『源氏』摂取の方法の意味を問うのが、本稿の趣旨となる。

(36) 吉海直人「『源氏物語』夕顔巻の物語設定―乳母のいる風景」（「国学院雑誌」昭和60〈一九八五〉年9月。のち『平安朝の乳母達―『源氏物語』への階梯―』世界思想社、平成7〈一九九五〉年）。なお惟光に当たる乳母子は行頼として実名で登場し、頭中将に相当するのが式部卿宮の中将で男主人公との関係性も似る。

(37) 池田和臣『源氏物語 表現構造と水脈』（武蔵野書院、平成13〈二〇〇一〉年）「『源氏物語』の水脈―浮舟物語と『夜の寝覚』―」

(38) 池田論の確認の意味で浮舟物語との類似項目を番号で掲げておく。以下は全集本頭注に指摘がないものとする⑯⑲㉓㉗㉙㉟㊳㊵である。

(39) 田中登「伝慈円筆『寝覚物語』切の出現―「斎宮」再考―」（関西大学「国文学」102、平成30〈二〇一八〉年3月）。新出断簡の翻刻を当該論考のまま掲出する。なお田中氏は既出断簡との関連を断簡二→断簡四（新出）→断簡一→断簡三と考えるが、断簡二に関しては白河の院において真砂が恋慕う冷泉院女三の宮と会った時に偶然寝覚の君を見かけた場面とも考えられるので、田中氏が考えるような直接的な接続関係を留保したい。断簡番号は『寝覚物語欠巻部資料集成』（風間書房、平成14〈二〇〇二〉年）に拠るもの。

(40) 大槻福子「『夜の寝覚』末尾欠巻部分をめぐって―最新の二断簡の解釈を中心に―」（「国学院雑誌」令和元〈二〇一九〉年6月）

（くげ　ひろとし　本学名誉教授）